

令和5年度 学校評価表

学校教育目標	夢や目標をもち ともに高め合う子どもの育成		
--------	-----------------------	--	--

a ミッション	深い学びの実現を目指したコミュニケーションの能力の育成	a ビジョン	(1)学校運営協議会に基づき、学校、保護者、地域が協働して学校文化を創造する学校 (2)「共同体感覚」を学級、異学年、学校全体に醸成できる学校 (3)「ことば」を中核とした人間関係づくり、自己表現ができる児童を育成する学校	尾道市立日比崎小学校
---------	-----------------------------	--------	---	------------

評価計画				自己評価				学校運営協議会委員評価			改善計画				
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	g 達成値		h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案	
					7月	1月				イ	ロ	ハ			
() 資質・能力の育成に関わること 自己理解・自らへの自信	確かな学力を育成する	学びに向かう意欲が高まる教育環境を創造し、自律的に学ぶ児童を育成する。 主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> 外国語科、外国語活動で培ってきたコミュニケーション能力を他教科へと発展させるために「学びの質を深める話し方、聞き方」を全学年に導入し、相互授業参観を通して徹底させる。 国語科における物語文、説明文の授業づくりを展開し、児童の読解力、表現力を身につけるとともに、対話型の授業を促進する。 教科横断型の「自由進度学習」の開発を通して、主体的に学ぶ児童を育成する。 	コミュニケーション 80%	話す 69.6% 聞く 79.6% 協力 72.8% 調整 71.8% 応答性 71.8% 依頼 71.2%	話す 71.1% 聞く 79.6% 協力 76.0% 調整 75.1% 応答性 75.1% 依頼 73.3%	93.8%	A	<結果> ・小学生のコミュニケーション能力に対するパフォーマンス尺度（1～6年）の肯定的評価の平均は、75.0（7月+2.2）%だった。 ・コミュニケーション能力については、対話型授業の展開やクラス会議等で一定の効果が現れた。 ・自律的学習動機尺度（1～6年）の肯定的評価の平均は、70.1（7月+1.2）%だった。 ・国語科の学期末テストにおける学級平均は、86.5（期待値+4.5）%だった。 <課題> ・コミュニケーション能力については、まだ目標に十分ではない。 ・主体的に学習する態度については、「人に言われるから学習する」というやらされ感が残っている。	8			Oコミュニケーション能力も確実に上がってきており、表現の仕方等、自信をもつことによってついでに子供も増えてきたように感じます。今後は苦手な児童に対しての取組を期待します。 O児童のコミュニケーションスキルが身につけてきたと感じます。それが自信につながり、成長していく過程でしっかりと他者と関わっていくことができると思います。取り残される児童が出ないように工夫されていると思います。 O人前で堂々と自分の考えを発表する様子は素晴らしいと思います。人前で話すことが苦手な児童への声かけ、失敗しても大丈夫という雰囲気づくり等、少しずつ自信がもてるよう取り組みをお願いします。教科横断型の「自由進度学習」の具体的な内容を教えていただきたいです。 Oなぜ外国語の学習ではコミュニケーション能力を高められるのかに他の教科ではできないのかを教えてくださいたいです。 Oコミュニケーション能力は社会人になって一番大切なことだと考えます。積極的な発言ができるよう指導していただけたらと思います。 O友人・家族・知人への「思い」「想い」は言葉にしないと相手に伝わりにくいので、手紙を書く機会等を活用しながら作文力の向上を図って下さい。「思い」には相手を思いやる行動が伴います。	<ul style="list-style-type: none"> 今後も「相手を気にすること」や「自分から発信すること」の指導を続けていく。 「人に言われるから学習する」というやらされ感を減らしていくため、一人一人の児童に「将来の夢や実現したいことを描かせること」を大切にしながら、より自己の変容を感じることができるよう振り返りの工夫を校内で検討していく。 学びの質を高める話し方・聞き方を土台に、国語科・外国語科でコミュニケーション能力を伸ばし、自分が変わったことを自覚させることができるよう、授業中だけでなく、様々な場面で取組を続けていく。 	
	豊かな心と健やかな体を育成する	他者の存在を意識し、他者とともに伸びようとする「共同体感覚」を身に付けた児童を育成する。 協同的な学校生活の場を意図的に設定し、自己肯定感、役立ち感、憧れ感、リーダーシップ、フォローシップを醸成する。	<ul style="list-style-type: none"> 「共同体感覚」をベースとした学級経営を文化として定着させる。（学級力向上、クラス会議） 2学期以降に異学年交流活動（ファミリー活動）を編成し、多様な人間関係づくりの場を創造する。 目標達成行動を積極的に促し、全委員会が課題解決、企画創造活動を推進させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「共同体感覚測定尺度」「自己理解、自己肯定感尺度」により、5月～12月比較により、肯定的回答が向上する。 アセスの生活満足度50以上の学級数 「チャレンジ精神」に係る児童（5、6年）のアンケートにより行動変容が見られる。 	自己理解・自己肯定感向上率 100%	自己理解平均 67.8 自己肯定感平均 71.2	自己理解平均 69.9 自己肯定感平均 74.3	自己理解・自己肯定感向上率 100%	A	<結果> ・「共同体感覚測定尺度」の「自己理解」は+2.1%、「自己肯定感尺度」は+3.1%向上した。 ・学級力向上アンケートを3回実施し、クラスの課題の改善策を考えついた。また、自分たちの課題や悩みをクラス会議の議題にあげ、解決をみんなで考えていくことができた。 ・アセスの生活満足度50以上のクラスは90%以上だった。 ・異学年交流活動（ハッピーフレンズ活動）を編成し、多様な人間関係づくりの場を設定することができた。（そのし・日比子フェスティバルの出し物、児童会・6年生が企画した遊び等） ・チャレンジ精神平均は+1.3%向上した。 ・異学年交流活動を進めて、リーダーシップ、フォローシップを醸成することができた。 <課題> ・ハッピーフレンズ活動が定例化できておらず、児童への混乱もあった。 ・クラス会議はクラスの課題について話し合うことが多く、個人の悩みとして話し合うことは少なかった。 ・全委員会が課題解決に向け、企画創造活動を行うことが十分ではなかった。	8			O縦割り班での学習はとても素晴らしいと思います。委員会の発表やプレゼンなどを全ての児童に体験させていたきたいです。 O縦割り班の活動は運動会等で導入できたらいいと思います。 O目標達成のための活動が効果的に計画、実施されたと思います。課題も浮き彫りになったと思うので次に向けて新たな計画が立てられればいいと思います。 O児童が主体的に考え取り組んでいる異学年交流が学習面・生活面で実を結びたいと考えています。 O自己肯定感が向上していることはとても良いことだと思います。次は、他者を肯定できる意識を高めていってさらに人間として成長できると思います。 O自分に自信がもてるよう、今後も継続した取組をお願いします。 O昨今、子供達が個別のグループに細分化しておりお互いの共通の友達を取り合う強欲が見られる事が多いです。子供達の考えをアウトプットさせながら孤立を防ぐ取組を強めます。	<ul style="list-style-type: none"> ハッピーフレンズ活動を年間計画に盛り込み、計画的に取り組むことができるようにする。 個人の悩みをみんなで考えていくという風土を育てていき、安心したクラスづくりに取り組んでいく。 代表委員会に委員会の委員長も出席させ、学校の課題を多面的に捉えさせ、全委員会が課題解決に向け企画創造活動を行うことができるようにしていく。
	主体的に健康な体づくりを行う児童を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> 縄跳びを取り入れた体力づくり及び縄跳び検定の実施を通して自らの身体づくりに意欲的に取り組む児童を育てる。 「食べる」ことの大切さを理解し、食べることに意欲と積極性を児童に培う。 	<ul style="list-style-type: none"> 体力づくり、健康づくりに関する取組状況アンケートにおいて、肯定的評価が向上する。 残食率が年度当初より減少する。 	80	体づくり 91.6% 残食率 3.7%	体づくり 92.7% 残食率 1.7%	101% 102%	A	<結果> ・肯定的評価が1.1%向上した。体育的行事や体育委員会の取組等により、児童の関心を高めることができた。また、職員への体育研修を行い、職員指導力向上を図った。 ・残食率が2%低下した。食育指導やもりもり週間等の取組により、児童の食への関心・意欲を高めることができた。個の実態に応じた配慮が、残食率低下につながった。 <課題> ・運動に苦手意識のある児童が固定化してきている。また、学年間の意識の差が大きい。外遊びや体づくりに対する教職員の意識の差がある。 ・牛乳の残食率が高い。	8			O今の子供達は学校のグラウンドのみが安全な「外遊びの場」となっていることがとても残念なことです。もっとしっかりとグラウンドで遊べるようにお願いします。 O成果が出ているので正しい取り組みができていっているかと思えます。運動が苦手な児童へどのようなことができるのか、その点に関する対策をよろしくお願いします。 O体力にかかわって全体的な底上げを期待します。 O「体を動かすことは好き」は高い割合ですが、実際「体力づくり」の時間は少ない状況です。家庭の状況、学校の限られた休憩時間の取組、運動場が狭い等の環境も関わってくると思いますが、体力づくりを行える工夫をお願いします。 O食べたい時に食べたい物を食べる者がとても多いと感じています。食べる時間に出された物をおいしく食べられるようになってもらいたいです。 O運動上手な児童は見守り、苦手な児童には補助が必要ですが、上の学年の支援の存在に期待します。	<ul style="list-style-type: none"> 体育委員会で、苦手意識のある児童が楽しめる取組を企画する。 職員への研修を継続し、体育科の指導力向上・体づくりへの関心を高めることにつなげる。 成長期に必要なカルシウムの摂取ができるよう、継続して指導する。 	

【自己評価 評価】
 A：100≦（目標達成）
 B：80≦（ほぼ達成）<100
 C：60≦（もう少し）<80
 D：（できていない）<60

【外部評価】 イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。 ハ：わからない。